はじめに……9

第1章 「反・反スタ思想家」としての吉本隆明……15
スターリニズムという妖怪／「党生活者」をめぐる論争
「党生活者」における「技術主義」「利用主義」／左翼の「最後の隠れ蓑」
「寛容思想」はいかにして生まれたか／『擬制の終焉』で私は吉本主義者になった
吉本が痛撃した異常なる「常識」／「反・反スタ思想家」としての吉本

第2章 日本的な「転向」の本質……51
日本的左翼の思考的ねじれはどこから来るのか／天皇陛下万歳とスターリン万歳
日本的転向の本質／佐野学、鍋山貞親の転向のモチーフ／封建的意識の残像
二つのヴィジョンの落差／無理やりの思考操作／佐野、鍋山がつきつけられたもの
彼らの転向はみっともないのか／「半日本人」と「無日本人」
現実社会をシャットアウト／「非転向」のほうこそが本質的な転向
吉本を吉本たらしめた最大の要因／中野重治の転向／「村の家」の父親が口にするセリフ
「日本封建性の優性遺伝」／「大衆の原像」にある父のイメージ

第3章 吉本にとってリアルだった芥川の死……105

吉本の社会的出自と思想の形成／自分の出自に「無理」をした芥川
「あらゆるチョッキを脱ぎすてた本音」／吉本による「私小説的な評論」
「人生は一行のボオドレエルにも若かない」をめぐって／「半日本人」のサンプル
高村光太郎論を書いた二重の動機

第4章 高村光太郎への違和感……135
大正末年生まれというポジション／吉本は敗戦をどう受け止めたか
文学的営為のすべての出発点／高村光太郎の秘密／高村光太郎の日記
「ブルジョワ息子」と「貧乏人の息子」という対比／吉本思想の核
多重的な父親殺しの意識化／「不可視の了解不可能性」

第5章 「了解不可能性」という壁……165
留学生の「落差問題」／普遍主義という解釈用具／普遍性から個別性への揺れ戻し
「第一の眼と第二の眼」／打倒すべき劣悪条件としての「家」
「家」中、ひとりの悪党なし／寂寥感の表現としてのデカダンス
永井荷風との比較／健康な肉体の生み出すデカダンス／「個人的環境の肯定」という選択
「下町オリエンタリズム」／「世界性」と「孤絶性」／吉本の導き出した結論
「青くさき新緑の毒素」／智恵子との出会いに垣間見た「性のユートピア」

幻想との戯れ／実生活からの復讐／絵空事的な夫婦生活／もろくも崩れた調和
「危機」の本質／社会的動向への妙なシンクロ

第6章 高村はなぜ戦争礼賛詩を書いたか……239

昭和十二年の「格差社会」／「想像の共同体」が持つ精神の浄化作用
高村のメンタリティの回路／デカダンスとピューリティの対比
吉本少年にとっての二・二六事件／唯一無二の解決策／自然法的な理念の破綻
「生活」という社会の介入／高村への違和感の遠因／二つのターニング・ポイント
漱石の留学との比較／〈家〉からの離脱という難事／光太郎の出自への親近感

第7章 抒情詩と戦争詩のあいだ……297

どうしても避けて通れない問題／「四季」派の抒情詩の背景にあるもの
三好達治の先祖返り／時代を覆いつくした伝統回帰性
根っこにある民衆特有の残忍さ／「四季」派的なものと対決する道
ボードレールを暗唱しているクマ公、ハチ公／「大衆の原像」論へのジャンピングボード
「盗っ人猛々しい」言説／擬ファシズム的扇動と擬民主主義的情緒
「日本庶民のひとりとして」という最高の武器／吉本に切り返された岡本の反論

第8章 「大衆の原像」から「自立の思想」へ……343
吉本にとっての「知識人」と「大衆」／「知識人化」に伴う罪悪感
大衆迎合論者の大いなる誤解／二つの言語の間にある「捩れの構造」
戦後プラグマチズムがとらええなかったもの／大衆のナショナリズムは把握不可能か？
吉本が受けたショック／スターリニズムの欺瞞性／刻苦勉励の克己思想
四十年前のリアルな敗北感／「ナショナリズム」の裏面に付着したリアリズム
大衆のナショナリズムの現実喪失、現実乖離／理想化され、概念化された「村の風景」
農本ファシズムはなぜ軍事ファシズムに敗北したか
スターリニズムとウルトラ＝ナショナリズム／ナショナリズムの「揚げ底」化
少し長めのあとがき……405
一族での最初の大学生／吉本への「倫理的な信頼感」／出身階級からの「別れ」